

青年期における主体的選択とアイデンティティ統合の関連

立教大学心理教育相談所 田沼裕介

The relation between subjective selection and identity integration in young adults
Yusuke Tanuma (Rikkyo University Counseling Center)

The purpose of the present study was to develop a subjective selection scale based on epigenetic theory (Erikson, 1959) and the Projet (Nishihira 1990), and to investigate the relation between identity integration, epigenetic personality development and subjective selection using both quantitative and qualitative analyses. In study 1, 353 college students (mean age 19.6 years old) completed a questionnaire. The subjective selection scale was composed of 3 factors: "strength of will", "the intentionality of the self-possibility" and "initiative". The results confirmed the reliability of the scale. All the 3 factors in the subjective selection scale correlated positively with the Fulfillment Sentiment Scale representing identity integration and the S-ESDS scale measuring epigenetic personality development. In study 2, semi-structured interviews with 9 of the students from Study 1 (3 men, 6 women) provided confirmation of the validity of the subjective selection scale.

Key words: subjective selection, identity integration, epigenetic personality development, college students

はじめに

青年期と主体的選択

Erikson (1959 小此木訳編 1973) に漸成理論によれば、その第5段階である青年期の課題として、アイデンティティの統合が挙げられている。その際に青年は、“社会の中で生きていく一人前の人間としてのアイデンティティが統合できるか、選択できるかの分岐点”(大野, 1995)として危機を経験する。この危機の概念についてErikson (1950 仁科訳 1977) は、漸成発達理論における各発達段階での発達主題の対を“危機的項目”としてあげ、“危機的”というのは転機の特質であり、前進か退行か、統合か遅滞かを決定する瞬間の特質である”と説明している。青年期の発達主題であるアイデンティティ統合対アイデンティティ拡散に関しては、危機は、自分にはどのような職業がふさわしいか、自分はどのようなイデオ

ロギーに従うのかなど、自分にとって大事な決定や選択を、真剣に迷ったり考えたり試行するといった自らのアイデンティティを問う時期があったかどうかとして青年に経験される。青年がこの危機を乗り越えて、アイデンティティの統合へと向かうためには、青年自身が自己の意志に基づいた主体的な選択によって、自分の生き方、人生を選び取らなければならない。西平(1990)は、青年がアイデンティティを統合し、成人になっていくことに関して、“〈成人になること〉は、大人になることが単に生理＝生物学的な成熟や社会的処遇だけを意味するのと異なって、心理＝社会的な成熟の主体的な選択(投企)を含んでいる”と述べている。つまり、アイデンティティを統合する際には、さまざまな可能性の中から、主体的に何かを選択し、それに自己を賭けていく、投企する必要がある。そして、青年は主体的選択(投企)を行い、アイデンティティ統合の方向へと向かい始

めることで、自立した人格として主体的に世界と関わることができるようになり、青年期以降に他者との関係で親密性を獲得した後、成熟した成人として次世代に対し生殖性を発揮していくための土台を築くことができるのである。

主体的選択に関する理論的背景

主体的選択とは、上記に述べたように、西平(1990)によれば、“投企(仏 *Projet*)”という言葉で説明されている。“投企”とは、青年が、自らの生き方を自らで選び取り、その選択に責任を持ち、使命感を持って生きることである。西平(1990)は、このとき“投企”という言葉には、Adler(1932 高尾訳 1984)の“生活様式の選択”という個別性としての側面と、歴史性から見た行動価値という側面が存在すると述べている。個別的な“生活様式の選択”^{ライフスタイル}という側面とは、人間の生活様式は自己の前に現れるさまざまな出来事に対し、自分なりの意味解釈の規範によって主体的に選び取られたものであると考えるものである。また歴史性とは、ひとりの青年がどのような時代に生き、そしてその時代性にどのような影響を受けたか、そしてその時代にどのように参加していくかということを意味している。人間の個別的な投企は、この歴史性によって条件付けられている。すなわち、個別的な人生への投企が良いものか悪いものかといった判断は、この個別的な投企がどれだけ、普遍的な全人類的な投企と一致できるかの度合いにかかっている。それはつまり、次世代に対し、より幸福な生活を保障するという歴史的な責任を意味している。このことが、歴史性から見た行動価値ということである。さらに西平(1990)は、青年期後期で人格が成熟してくると“自己と社会・政治・歴史との統合”が起こり、それは“社会へ開くかまえてあり、自己と社会・政治・歴史が統合されてゆく過程”であると述べており、主体性をもった人格が責任や使命感を持って世界と能動的に関わるときには、この歴史性という概念もまた欠くことができないと言えるだろう。つまり個別性だけでなく、歴史性を含んだ主体的選択を行うことが個人だけではなく社会に開

いたアイデンティティを統合していく上で必要であると考えられる。

ここで、主体的選択が生じやすくなるために必要な要素について述べる。主体的な選択が行われるためには、まず第一に主体性の基礎となる意志を必要とすると考えられる。第二にその意志に積極的な方向を与える、興味・関心、目標・理想の形成、そしてそれを具体化する計画性という事柄が挙げられる。

Bühler(1967 原田訳 1969)は思春期の意志の発達が、“純然たる機能としての、内容のない意志、新しい自己の目標設定(これは幼児の場合第一反抗期に導いたように、ここでは第二反抗期に導く)、新しい価値・理想の形成、および個人の新たな選択など”といった段階を踏み、幼児期の意志の発達と同じプロセスをたどることを見出している。

さらにErikson(1959 小此木訳編 1973)の漸成発達理論に基づいて、主体性のもとになる意志と選択の方向づけとなる目標という観点から主体的選択の要素について考えてみると、意志に関しては、Erikson(1959 小此木訳編 1973; 1964 鑑訳 1971)における第2段階の“自律性”およびその人格的活力である“意志力”の獲得が挙げられる。この段階の適切な解決により“‘私は意志する存在である’ I am what I will”(Erikson, 1959 小此木訳編 1973)という自律的意志の感覚を得ることができる。次に選択の方向づけとなる目標についてErikson(1959 小此木訳編 1973; 1964 鑑訳 1971)の第3段階主導性対罪悪感の好ましい割合での解決と、その段階での人格的活力である“目的性”を獲得することによって身につけられるものと考えられる。目的性とは“罪悪感あるいは罰を受けるかもしれない絶えざる不安などによっても禁止されていない価値ある目的を心に描き、実際に追及する勇気”(Erikson, 1964 鑑訳 1971)である。そしてこの段階の望ましい解決により、“‘私はかくありたいと想像する存在である’ I am what I can imagine what I will be”(Erikson, 1959 小此木訳編 1973)という

志向性の感覚を得ることができる。Erikson (1959 小此木訳編 1973; 1964 鑑訳 1971) の漸成発達理論の第2段階、第3段階は年齢的には、2歳～5歳にあたり、Bühler (1967 原田訳 1969) の意志の発達のプロセスにも合致し、そのプロセスは青年期において再演されるのである。

本研究の目的

以上より、主体的選択についての概観を述べてきたが、主体的選択に関する研究は西平 (1990) による理論的考察や、半構造化面接によりいくつかの領域において“危機”の有無と“傾倒 (コミットメント)”の有無を判定することで、面接協力を4つのアイデンティティ・ステータスに分類するMarcia (1966) のアイデンティティ・ステータス面接などが見られるのみで、人格特性としての研究はほとんど見られていない。本研究では、青年がアイデンティティを統合し、西平 (1990) が述べる意味での成人になっていくために必要な人格特性、すなわち主体的選択傾向として捉えることで、量的・質的の両側面からアプローチを行い、より実証的に研究を行うこととする。

研究 1

目的

研究1では、Erikson (1959 小此木訳編 1973) の漸成発達理論の第2段階の課題：自律性とその段階で獲得される人格的活力である意志力、第3段階の課題：主導性とその段階で獲得される人格的活力である目的性を理論的背景として、人格特性としての主体的選択傾向を測定する主体的選択尺度の作成を行う。また主体的選択傾向とアイデンティティ統合の指標となる充実感との関連やErikson (1959 小此木訳編 1973) の漸成発達理論に基づく人格発達との関連を検証することを目的とする。

方法

調査対象者 都内私立大学生353名を対象とし、一斉法による無記名方式で質問紙調査を行った。平均年齢は、19.63歳 ($SD: 1.03$) であった。

調査期間 2005年6月中旬に調査を行った。

調査内容 1. 主体的選択尺度：主体的選択傾向の構成要素として、Erikson (1959 小此木訳編 1973) の漸成発達理論における (a) 第2段階の課題：自律性とその段階で獲得される人格的活力である意志力、(b) 第3段階の課題：主導性とその段階で獲得される人格的活力である目的性より下位概念を構成し、75項目を作成した。項目の内容妥当性に関しては、青年心理学を研究領域とする研究者1名の協力を得てともに検討を行った。

次に作成した項目を用いて大学生122名 (平均年齢20.43歳, $SD = 1.62$) を対象に予備調査を行った。調査時期は2005年1月であった。各質問項目に対する回答は5件法で評定を求めた。得られたデータを因子分析 (主因子法, プロマックス回転) した結果、第1因子：「意志の強さ」、第2因子：「自己の志向性への可能性」、第3因子：「イニシアティブ」、第4因子：「決断力・判断力」の各因子5項目からなる4因子を抽出し、全20項目からなる主体的選択尺度を構成した。

2. 充実感尺度 (大野, 1984) (Table 1)：大野 (1984) によって、西平 (1979) の現代青年の心情モデルをもとに作成された尺度である。大野 (1984) は生活気分としての充実感がアイデンティティ統合の実感であると仮定し、充実感がアイデンティティ統合の各側面と考えられる自立・自信、連帯、信頼、時間的展望などの健康的な自我発達の反映であることを示している。尺度の構成は、アイデンティティ統合の実感である「充実感気分—退屈・空虚感」因子とアイデンティティ統合の各側面を表す3つの因子、「信頼—不信」因子、「連帯—孤立」因子、「自立・自信—甘え・自信のなさ」因子の全4因子からなる。各因子は5項目ずつで尺度全体では20項目となる。各質問項目に対する回答は5件法で評定を求めた。

3. S-ESDS尺度 (三好・大野・内島・若原・大野, 2003) (Table 2)：Erikson (1959 小此木訳編 1973) の漸成発達理論に基づいた自我発達の尺度であるOches & PlugのErikson and Social Desirability Scaleを邦訳し短縮版にしたもの。第

1 段階：基本的信頼対不信から第 7 段階：生殖性対停滞までの各段階の人格発達を「～の感覚」(a sense of～)として測定する。各段階 7 項目ずつの計 49 項目と社会的望ましき尺度で構成される。また本研究では、社会的望ましき尺度は用いなかった。各質問項目に対する回答は 5 件法で評定を求めた。

結果

予備調査で構成した主体的選択尺度 20 項目について、各項目の粗点をその項目の得点とし、再度、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その際、「流行しているから、それはよいものだと思うことがよくある。」の 1 項目に関し、因子負荷量が .35 を下回ったため、その項目を削除し、再度、因子分析を行い、固有値の落ち込みや構成概念の妥当性から 3 因子を採択した (Table 3)。

第 1 因子は、「私は、自分の決めたことならばどんなことでもやり抜く覚悟がある。」などの 9 項目で「意志の強さ」因子とした。第 2 因子は「私は、自分が将来どうなりたいか分らない。(逆転)」「私は、自分の進むべき道を分かっている。」などの自分の興味・将来・可能性といったものについて明確な意識を持っているかどうかといった 5 項目で、「自己の志向性への可能性」因子とした。第 3 因子は「私は、思いついたアイデアや企画を実行することが好きだ。」などの 5 項目で「イニシアティブ」因子と名づけた。「イニシアティブ」とは、Erikson (1959 小此木訳編 1973) の漸成発達理論の第 3 段階の課題のポジティブな側面をあらわす言葉であり、日本語訳では主導性・積極性・自発性といった訳語が与えられている。続いて各因子に対応する尺度得点の信頼性を推定するため、Cronbach の α 係数を算出した。尺度全体の α 係数

Table 1 充実感尺度 (大野, 1984)

充実感気分—退屈・空虚感因子

毎日、毎日変化のない単調な日々でつまらない。(逆転)
生活に充実感で満ちた楽しさがある。
私は生きがいのある生活をしている。
毎日の生活にはりがある。
毎日の生活に退屈している。(逆転)

自立・自信—甘え・自信のなさ因子

私は精神的に自立していると思う。
私は主体的に生きていると思う。
私は独立心が強いと思う。
いざとなるとどうしても人をたよってしまう。(逆転)
自分の信念にもとづいて生きている。

連帯—孤立因子

だれも私を相手にしてくれないような気がする。(逆転)
私ひとりだけがとり残されているようで寂しい。(逆転)
自分がなさけないやになる。(逆転)
私をわかってくれる人がいないと思う。(逆転)
自分の理想とはかけ離れた今の生き方に焦燥感を感じる。(逆転)

信頼—不信因子

自分の責任をはたすことに喜びを感じる。
生まれてきてよかったと思う。
毎日の生活の中でものをやりとげる喜びがある。
私には毎日の生活の中でなにかへの使命感がある。
私は価値のある生活をしていると思う。

Table 2 S-ESDS (三好他, 2003) 質問項目

基本的信頼感対不信感因子

私の未来は明るいと思う。
私は、元気がないと思う。(逆転)
私は生きている間には、自分がしたいことを成し遂げられると思う。
私は人から信用されていないように思う。(逆転)
人は信用できるものだ。
人類って素晴らしいと思う。
私の人生には何かが足りないと思う。(逆転)

自律性対恥疑惑因子

私は必要以上に、人に申し訳ないような気がする。(逆転)
自分で何かを決めた後、それが間違いだったような気がする。(逆転)
友だちから非難されるのではないかと心配になる。(逆転)
穴があったら入りたいとか、人前から消えてなくなりたいと思うことがある。(逆転)
誰かが、私の欠点に気づいてしまうような気がする。(逆転)
私は意志が強い。
人の意見に賛成できないとき、それを相手に伝える。

主導性対罪悪感因子

自分の望みをかなえるためなら、あえて冒険してもよい。
私は人と競争(することで自分の能力を発揮)することを楽しむ。
私は自分が計画したことを実行して、それを成功させる自信がある。
私は好奇心や探究心が旺盛だ。
人と競争するとき、私は勝つことに一生懸命になる。
(日頃)私はわくわくするようなプランを立てている。
私は何かをする際に、新しい方法を試してみることにためらいを感じる。

生産性対劣等感因子

自分には能力があると思う。
何かをやろうと思っても、私にはそれを始めるほどのエネルギーがない。(逆転)
私には能力がないので、人生で本当にしたいことができないような気がする。(逆転)
私は、何かやり遂げられるような気がする。
私は自分の能力を最大限に生かしている。
どうせ失敗するだろうから、難しいことは避けてとおる。(逆転)
私のしたことを(人が見たら)人ならもっとうまくできたのではないかと、決まり悪い思いをする。(逆転)

アイデンティティ達成対アイデンティティ拡散因子

私って本当はどんな人間なのかわからない。(逆転)
私は、のけ者にされているように感じる。(逆転)
人生に望むものが定まらない。(逆転)
私はいつも演技したり、見せかけの行動をしているように思う。(逆転)
私は、私であることに誇りを感じている。
私のことを人がどう思っているか、よくわからない。(逆転)
私は、自分に合った生き方をしていると思う。

親密性対孤立因子

私には喜びや悲しみを分かち合う相手がいる。
誰も私のことなど本当には気遣ってくれないと思う。(逆転)
本当の私のことなど理解してくれた人なんて、これまで誰もいない。(逆転)
私はこの世の中で、ひとりぼっちのように感じる。(逆転)
素で(飾らないで)付き合える相手がいる。
私は人とプライベートなことを話すことがある。
人に自分のことをさらけ出すと、不安になることがある。(逆転)

生殖性対停滞因子

私は、人により影響を与えている。
小さい子どもの世話楽しい。
私は、将来まで残るような価値あることをしている。
結局のところ子育ては、楽しみよりもむしろ重荷だと思う。(逆転)
私は、人が成長しようとしていることに役立つようにしている。
私は自分が死んだ後まで残るようなことは、これまで何もしてこなかったと思う。(逆転)
私は、人生を無益に過ごしていると感じる。(逆転)

は $\alpha = .87$ であった。第1因子では α 係数は $\alpha = .82$ 、第2因子では $\alpha = .78$ 、第3因子では $\alpha = .73$ であり、各因子で.70以上 α 係数が算出され、尺度の内的整合性が示されたといえる。

また、S-ESDS、充実感尺度についてもCronbachの α 係数を算出した。結果は、S-ESDSについては、各下位尺度では $\alpha = .65 \sim .81$ 、全体では $\alpha = .93$ であり、尺度の内的整合性はおよそ保たれていた。また充実感尺度については、各下位尺度では $\alpha = .62 \sim .86$ 、全体で $\alpha = .87$ であり、こちらも尺度の内的整合性はおよそ保たれていた。

次に、下位尺度得点を求めるにあたって、各下位尺度を構成する項目の評定値の平均を各下位尺度得点とし、それに基づき、主体的選択尺度3因子とS-ESDSおよび充実感尺度の下位尺度間のピアソン積率相関係数を求めた（Table 4）。その結果、主体的選択尺度3因子と充実感尺度との相

関は、0.1%水準で有意な正の相関（ $r = .20 \sim .71$ ）が示され、また主体的選択尺度3因子とS-ESDSとの相関は、S-ESDSにおける7つの下位尺度全てで、無相関検定の結果、0.1%水準で有意な正の相関（ $r = .24 \sim .67$ ）が示された。

考察

本研究の結果から、青年がアイデンティティを統合し、西平（1990）が述べるような意味での成人になるために必要な人格特性としての主体的選択傾向を測定する主体的選択尺度を作成した。主体的選択尺度は因子分析の結果、「意志の強さ」「自己の可能性への志向性」「イニシアティブ」の3因子を抽出することができた。主体的選択尺度3因子「意志の強さ」「自己の可能性への志向性」「イニシアティブ」と充実感尺度との間には正の相関（ $r = .20 \sim .71$ ）が見られ、主体的選択に関する人格特性とアイデンティティ統合の実感

Table 3 主体的選択尺度の因子分析結果（主因子法 プロマックス回転）

尺度全体 $\alpha = .87$ 項目(Rは逆転項目)	因子			
	F1	F2	F3	共通性
第1因子:「意志の強さ」因子($\alpha = .82$)				
私は、自分の決めたことならば、どんなことがあってもやり抜く覚悟がある。	.88	-.16	-.04	.61
私の決意は、固いものである。	.68	.03	.12	.59
私は、自分の信念を貫くことができる人間だと思う。	.66	.10	.11	.62
私は、目標を達成するためなら、自分を甘やかすようなことはしない。	.64	-.01	-.11	.34
私は、必要とあらば、はっきりものを言うことができる。	.60	-.04	-.01	.33
私は、周りの人の強い反対にあっても、自分がこうだと思ったことをやり続ける。	.42	-.01	.18	.29
私は、自分ひとりでは物事を判断できないと思うことがよくある。(R)	-.42	-.14	.01	.25
私は、苦しいことがあると、楽なほうに逃げがちだ。(R)	-.42	-.04	.10	.16
私は、どんな状況であっても、断固とした態度をとることができる。	.38	.02	.07	.19
第2因子:「自己の可能性への志向性」因子($\alpha = .78$)				
私は、自分が将来どうなりたいか分からない。(R)	-.04	-.84	.15	.64
私は、自分の進むべき道を分かっている。	.23	.68	-.05	.64
私は、自分にとって興味あるものが、どういふものか分からない。(R)	.18	-.60	-.07	.31
自分の可能性というものを考えたとき、私には何も思いつかない。(R)	.03	-.54	-.16	.38
自分にとって大事なことが何であるか、私は知っている。	.08	.48	.11	.36
第3因子:「イニシアティブ」因子($\alpha = .73$)				
私は、思いついたアイデアや企画を実行することが好きだ。	-.12	-.03	.87	.64
私は、計画をたて、それを練ることが好きである。	.01	.02	.67	.47
私は、企画をたてる際には、いろいろなアイデアが浮かぶ。	-.11	.16	.58	.38
私は、従来にない新しいやり方を考えることが好きだ。	.17	-.05	.39	.22
私は、自分の得意分野であれば、積極的にみんなを引っ張ることができる。	.26	-.07	.37	.23
因子寄与率(%)				
	28.67	6.26	5.39	40.32
因子相関行列				
	F1	1		
	F2	.56	1	
	F3	.51	.48	1

である充実感、および自立・自信、連帯、信頼、時間的展望といったアイデンティティ統合の各側面とに正の関連があることが示された。また Erikson (1959 小此木訳編 1973) の漸成発達理論における7つの段階全てにおいて、正の相関 ($r = .24 \sim .67$) が見られ、主体的選択に関する人格特性が人間のライフサイクルにおける人格発達全般に関わっているものであることが示唆された。その中でも主体的選択尺度を作成するにあたっての理論的背景とした、第2段階「自律性対恥・疑惑」との相関は $r = .30 \sim .59$ 、第3段階「主導性対罪悪感」との相関は、 $r = .48 \sim .67$ とおおむね強い正の相関を示し、主体的選択尺度の構成概念妥当性を示したものと考えられる。また、第5段階「アイデンティティ達成対アイデンティティ拡散」との相関は、 $r = .32 \sim .63$ と正の相関が見られ、アイデンティティ統合を表す充実感尺度と主体的選択尺度の関連と同様の示唆を得ることができた。特に、「自己の可能性への志向性」因子との相関は $r = .63$ と強い正の相関が見られ、「自己の可能性への志向性」がアイデンティティの感覚と強く結びついたものであると考えられる。さらに主体的選択に関する人格特性と「生殖性対停滞」との相関に関しては、 $r = .40 \sim .52$ と中程度の正の相関が見られた。このことは主体的選択に関する人格特性が、次世代に対し何かを生み出し、

育てる傾向である生殖性と関連が強いことを示しており、主体的選択が西平 (1990) の言う次世代への歴史性を含んだ投企であることを反映しているものと考えられる。

研究 2

目的

面接調査を行い、主体的選択の具体性を分析することで、研究1で作成した主体的選択尺度の内容妥当性を検討することを目的とする。

方法

面接協力者の選出 研究1の際の質問紙調査協力者 (353名) の中から、面接調査に協力を得ることができた9名 (男性3名、女性6名) に半構造化面接を行った。

調査項目 大野 (1984) の全生活空間に関する質問項目を参考に質問項目を作成した。本研究では、大学生の生活態度やアイデンティティの表れを調査するため、全生活空間に関する質問は、大学生の主だった生活領域である、クラブ・サークル、アルバイト、大学の授業、大学の志望、友人関係、家族関係、余暇・趣味、将来の志望や、その他、面接協力者にとって重要な領域および理想の生き方といったものについて質問を行った。さらに質問紙調査によって得られた知見から、主体的選択に関する質問項目を追加作成し、検討を行っ

Table 4 主体的選択尺度とS-ESDS、充実感尺度との相関

		主体的選択尺度		
		意志の強さ	自己の可能性への志向性	イニシアティブ
S-ESDS				
S-ESDS	基本的信頼対不信	.33***	.45***	.34***
	自律性対恥・疑惑	.59***	.46***	.30***
	主導性対罪悪感	.50***	.48***	.67***
	生産性対劣等感	.61***	.62***	.48***
	アイデンティティ達成対アイデンティティ拡散	.37***	.63***	.32***
	親密性対孤立	.24***	.41***	.30***
	生殖性対停滞	.46***	.52***	.40***
充実感尺度				
充実感尺度	充実感—退屈・空虚感	.31***	.53***	.35***
	信頼—不信	.35***	.44***	.44***
	自立・自信—甘え・自信のなさ	.71***	.55***	.44***
	連帯—孤立	.33***	.48***	.20***
N=353		***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$		

た。主体的選択に関する質問は、「意志は強い方だと思いますか。」といった意志の強さに関する質問と「チャレンジすることは好きですか。」「面白いことを考えたり、企画したりする方ですか。」といったイニシアティブに関する質問を行った。「自己の可能性への志向性」に関しては、将来の志望および理想の生き方への質問の回答を分析対象とした。

調査期間 2005年9月～11月。

調査手続き 一対一の半構造化面接により筆者が調査を行った。面接時間は25分から80分であった。面接協力者には、面接が論文作成のための目的のみで行われること、発言内容は個人が特定できない形で論文に載せ、プライバシーは厳密に守ることなどを事前に説明し、面接協力者の理解を得て、全発言を録音した。面接後、録音された記録から逐語録を作成し、分析に使用した。

分析方法 群分けを行うために主体的選択尺度の3因子「意志の強さ」「自己の可能性の志向性」「イニシアティブ」それぞれの尺度得点を、標準化（Z得点化）し、 $Z > 55$ の協力者を高群、 $45 \leq Z \leq 55$ を中群、 $Z < 45$ の協力者を低群として各群での発言内容と実際のZ得点との対応を分析した。

結果と考察

意志の強さに関する発言（Table 5）高群4名（面接協力者A：67.65点、B：62.83点、C：59.62点、D：59.62点）、中群1名（F：53.19）、低群4名（E：43.55点、G：40.34点、I：37.12点、H：27.48点）

意志の強さに関する結果は、高群（面接協力者A、B、C、D）では、「意志が強いというか、やると決めたらもうすぐく、すぐくやるみたいな感じかなとも思いますし。（A）」や「最後まで自分の責任っていうのを果たしたいと思っているので、我慢強い（B）」などの発言が見られ、自分で決

Table 5 意志の強さ得点に対応する面接協力者の回答（抜粋）

群	協力者	性別	意志の強さ	質問「意志は強い方だと思いますか」「なぜそう思いますか」
H	A	男	67.65	結構強いほうじゃないかなと思います。…他のチームメイトとかと比べても、意志が強いというか、やると決めたらもうすぐく、すぐくやるみたいな感じかなとも思いますし。…毎日、どれぐらいかな、2キロ3キロぐらいですけど、走ってから、朝早起きして走って学校に行っていました。
	B	女	62.83	うん、強い方だと思いますね。…最後まで自分の責任っていうのを果たしたいと思っているので、我慢強い、痛みとかにも多分強いと思います。
	C	女	59.62	自分が好きなことをやるときは、すぐ強い、気持ちが強くなる時はありますね。…部長って職についたことも、自分が何か、誇りに思ってるっていうか、あと部員が気持ちよく活動できるかっていうことを考えると、そういうときはがんばれることはありますね。
	D	男	59.62	そうですね。意志は強いほうだとは思いますが。何か目標を決めたら最後までやり通すという点では強いと思います。あんまりやりたくないことだと、途中で諦めがちなんですけども、自分でテーマを設定したことには、そうですね、やり通しますね、最後まで。
M	F	女	53.19	何かが途中で諦めることとかでも、自分がやりたかったらそのまま続けたりとか。…具体的なエピソード。レポートとかやってるときに周りが何か適当でやめよう、遊ぼうとか言うんですけど、一度はじめちゃうと何かもう完成しないと気がすまなくて、私、レポートやってるから遊んできていいよみたいな。
L	E	女	43.55	かなり（意志は強い）。かなりと言ってもかなりの基準が自分の中でしかないですけど。人と自分を比較してどうかではなくて、自分の思ったように行動するっていう。…でも行動に移すまでには思ったことが大きくないと行動に移らないっていう考え方なので、そういう面で意志が強いのかなと。もともとと思うこと自体が強いっていうのかもしれない。…ちゃんと自分の納得できる形に持っていけるか、持っていくところまではする。…何回か作品出ますけど、一個一個に全力を尽くすっていうか、…争いごとをしたくないと思っていて、要するにトップになりたいっていう感覚がないんですね。あのこうトップになるためには絶対戦争しなきゃいけないっていうことを思っていて、そうじゃない部分で自分は自分として確立したいっていうところがあるんで、そういう意味でのチャレンジにはまったく興味が無い。
	G	女	40.34	ちゃんと決めたことに関しては、ちゃんとやるんですけど、結構迷ってることに限っては、ひたすら意志はゆれちゃうっていうか。
	I	男	37.12	そんなに強いほうではないですけど。最近、ちょっと生活習慣が乱れていて、早く寝ようと思って、つい夜更かしとかしてしまうので。
	H	女	27.48	そんなに強くないと思います。基本的にめんどくさがりなんで、面倒くさいと途端にやる気がなくなるんで。意志が強いといわれるとイエスとは言えないかも。

注）文中の（ ）内は筆者による補足、…は省略。群分けの基準は、H： $Z > 55$ 、M： $55 \geq Z \geq 45$ 、L： $45 > Z$ （Z：標準化された得点）

めた目標はやり通す、責任を果たしたいといった意志の強さを示す傾向が共通に語られていた。低群（E, G, I, H）では、「自分の意志がはっきりしている時はやりとおす事が出来ると思います。それで、反対されて迷ったら多分できなくなるかな。（G）」や「基本的にめんどくさがりなんで、面倒くさいと途端にやる気がなくなるんで。意志が強いといわれるとイエスとは言えないかも（H）」といった表現が見られ、決心が揺らいでしまったり、その時の気持ちに流されてしまうような傾向が語られていた。しかしながら協力者Eのように「意志の強さ」因子のZ得点は低群に該当するが、「ちゃんと自分の納得できる形に持っていけるか、持っていくところまではする。・・・何回か作品出てますけど、一個一個に全力を尽くすっていうか」と語り、「かなり（意志は強い）。かなりと言ってもかなりの基準が自分の中でしかないですけど。人と自分を比較してどうかではなくて、自分の思ったように行動するっていう。・・・でも行動に移すまでには思ったことが大きくないと行動に移らないっていう考え方なので、そういう面で意志が強いのかなと。もともとと思うこと自体が強いっていうのかもしれない。」と回答し、低群でありながら意志の強さを示す発言をする例もあった。また協力者Eは、自分が納得する形で思ったことを行動に移すという点で意志が強いと述べているが、それと同時に「争いごとをしたくないと思っていて、要するにトップになりたいっていう感覚がないんですね。・・・トップになるためには絶対戦争しなきゃいけないっていうことを思っていて、そうじゃない部分で自分は自分として確立したい」と語っており、他者とぶつかってでも自分の意志を通すということに関しては避けている様子も見られた。この協力者Eの場合、内的な感情を統制する「意志の強さ」は強いものを持っているが、外的な他者に対して意志を発揮するときには、意志が十分発揮できない例と考えることもでき、内的な気分に負けない「意志の強さ」と人間関係の中で発揮される「意志の強さ」の関係や違いを新たに検討する必要があると思われる。

以上より、高群と低群の発言はおおむね「意志の強さ」のZ得点と対応しており、「意志の強さ」因子の内容妥当性はおおむね確認されたと考えられる。

自己の可能性への志向性に関する発言（Table 6）高群3名（C：63.64点、E：59.05点、A：56.75点）、中群5名（F：54.45、G：54.45点、B：52.15点、I：49.85点、D：47.55）、低群1名（H：42.95点）

自己の可能性への志向性については、高群（C, E, A）では、「でもそれが、意味のある活動だったっていえるのは、人が成長したからなんですよ。だからそういうのに関わりたくなって思っ。だから、創作の趣味は趣味として残して、自分は教員になりたいなって思ったんですね。（C）」、「やっぱりそういうものと直接向き合えるのは、教師なんだよなって思ったときに、・・・そういう人たちと向き合ってみたくなって。（E）」、「（就職をするのは）自分も家庭持ったらお金稼がなきゃいけないのかなっていう風に思ったから（A）」「結婚とかした時に、自分も好きなことをやらしてもらってたんで、子どもにも結構、好きなことをやらしてあげたいかなみたいになっていう風に考えてます。やっぱりそういうので、世界って成り立ってるもんじゃないかなって考えてます。（A）」といった表現が見られた。これら高群の協力者は、自分の価値観や将来についてははっきりと言葉にして語ることができていた傾向があった。また、語られた内容は、人の成長や子育てなどの次世代への責任が意識されたものであった。次に中群（F, G, B, I, D）は、まず協力者Fのように「何も知らないのにけなすのとかって、微妙じゃないですか。だから自分が学んで、それからだったら思う存分けなせるかなって。あとは、親友の子が医学部行って、少しでも近いフィールドに行きたかったから。」と将来の志望について語るのだが、一見ひねた感じがする者や、協力者Gのように「英語が好きで、で、先生っていう仕事はいつも見てるじゃないですか。だからどういう仕事か何となくだけど、分かるし、じゃあ英語の教職免許がとれるようなとこって。」と志望を語るが、「最近ちょっ

と揺れてきているのでわからないですね。」と自分の興味関心から進路選択を行なったが、迷いが出てきている者。協力者Bのように理想の生き方を「ほんと一番には自分がちゃんと確立している

ことですね。」と語り、自己のライフスタイルを着々と築いている発言が見られた一方で、就職に関し、「今のところは、化粧品関係とアパレルとあと、下着メーカーとか、あとはなんだろう、広告

Table 6 自己の可能性への志向性得点に対応する面接協力者の回答（抜粋）

群	協力者	性別	志向性	質問「大学を卒業したら、そのあとどうしようと思っていますか」「あなたにとって理想の生き方とはどんな生き方ですか」「今の生き方についてはどう思いますか」	
	C	女	63.64	でもそれが、意味のある活動だったっていえるのは、人が成長したからなんです。だからそういうのに関わりたいなって思ってる。だから、創作の趣味は趣味として残して、（将来は）自分は教員になりたいなって思ったんですね。（理想の生き方は）やっぱり自分らしく、その人がその人の持っているものを生かす形で生きるのがいいなと思って、…職業という形では表れない才能っていう個性もあると思うんですよ。でも何かしらの形で、それらを満足させるような活動をやりつつ、仕事もして、何とか食っていける生き方っていうのはいいと思いますね。できれば結婚して、子どもと家庭を持つというのが理想だと思いますね。	
	H				
	E	女	59.05	中学校の教員になるならなりたいなって思ってるんですけど、なんかよく分からない時期じゃないですか、…やっぱりそういうものと直接向き合えるのは、教師なんだよなって思った。（理想の生き方は）無駄なことなんか一つもないなって思えるような生き方。自分の成し遂げることに一個一個意味があるんだって思ってるので、そういうこと、物事をそうやって捉えてやっていく、姿勢を持って生きてくっていう。…（今の生き方は）ちゃんと意味をもって行動していると思います。	
	A	男	56.75	（就職するのは）自分も家庭持ったらお金稼がなきゃいけないのになってという風に思ったから。…結婚とかした時に、自分も好きなことをやらしてもらって、子どもにも結構、好きなことをやらしてあげたいかなみたいになっていう風に考えてます。やっぱりそういうので、世界って成り立ってるもんじゃないかなって考えてます。	
	F	女	54.45	何も知らないのにけなすのとかって、微妙じゃないですか。だから自分が学んで、それからだったら思う存分けなせるかなって。あとは、親友の子が医学部行って、（将来は）少しでも近いフィールドに行きたかったから。…（理想の生き方は）自分のペースが守れるところ（で暮らすこと）がいいなって。今の自分の生き方は、基本的にやる気がないと思ってます。	
	G	女	54.45	英語が好きで、で、先生っていう仕事はいつも見てるじゃないですか。だからどういう仕事か何となくだけど、分かるし、じゃあ英語の教職免許がとれるようなことって。…ちゃんと考えたのは、高3の夏くらい。最近ちょっと揺れてきているのでわからないですね。（理想の生き方は）なんか自分はこうなりたいんだとかこれができるようになりたいっていう思いを持ってると成長していける（生き方）。	
	M				
	B	女	52.15	（将来は）今のところは、化粧品関係とアパレルとあと、下着メーカーとか、あとはなんだろう、広告代理店とか出版。あんま定まっていんですけど、そういう感じですね。（理想の生き方は）ほんと一番には自分がちゃんと確立していることですね。（自分が確立しているというのは）ライフスタイルにしても、好きなものとかいろいろあるじゃないですか。そういうのとかちゃんと周りにあったり、んー、なんだろう、自分が好きな仕事をしてたり、好きなものに囲まれてたりとか、そういううちっちゃいことなんですけど、そういうところで。今の生き方は、やっぱり自分で好きなものを選んで、そのバイトにしても、服にしても、家にしても、自分の好きなものとか自分で選んでやってるので。	
	I	男	49.85	就職しようと思ってます。図書館司書になればいいんですけど、可能性が今、ちょっと厳しいんで、普通に一般職とかですかね。…中3からですね。…何か、中学の時、ずっと図書館とか通い詰めてたんで働けたらいいかなって。	
	D	男	47.55	いろいろな経験をしてみたいと思ったんですね。小学生の先生になれば…やはりいろいろな経験ができるとして、そういう仕事は他に無いかなと思って選びました。…今、教育学を勉強して、すごい海外の教育に興味があるんですね。（海外の教育を）見てきたんですけども。…まあ多少お金はかかるんですけど、そういうところに行くと、経験を貰うっていう意味で。	
	L	II	女	42.95	（将来は）まったく見当が付きません。…なんで、こう自分でも思いつかないのか自分でも分かりません。…理想の生き方も探してる途中でですけどね、全然。…多分、全部、今、自分がこう自分のことをちょっといやだなとか思ってるところを克服した人が理想形なんだと思いますけどね。…なんだろう、なんかこう、何もしないで終わるっていうのはいやだなって。…なんか無為に生きるっていうか。（趣味の音楽は）自分の半分。ないと生きていけない。…（音楽には）関わってみたい。聞くだけでもずっとしてきたい。

注) 志向性：自己の可能性への志向性 文中の（ ）内は筆者による補足、…は省略。群分けの基準は、H：Z>55，M：55≧Z≧45，L：45>Z（Z：標準化された得点）

代理店とか出版。あんまり定まってないんですけど、そういう感じですね。」といくつか候補を考えているが選択を迷っている者。協力者Iのように「就職しようと思ってます。図書館司書になれればいいですけど、可能性が今、ちょっと厳しいんで、普通に一般職とかですかね。」「何か、中学の時、ずっと図書館とか通い詰めてたんで働けたらいいかなって。」と自己の将来への志向が現実問題との葛藤で揺れてきている者や、協力者Dのように「小学生の先生になれば、・・・やはりいろいろな経験ができるとして、そういう仕事は他に無いかなと思って選びました。」「まあ多少お金はかかるんですけど、そういうところ（外国での教育研修）に行くと、経験を言うっていう意味で」と将来の志望は定まっているが、それと同時に経験を積んで、さらに興味や可能性を広げたいという者など、様々な様相が示されていた。これら中群に共通するものとしては、自己の可能性・興味を意識し、その方向に向かっている部分があると同時に興味・可能性についての揺れも持っているという特徴が挙げられる。また、個人の興味・関心から志向性を語ることが多く、高群ほど、次世代の責任に関しては意識していないようであった。低群では、「(将来は)まったく見当が付きません。(H)」と発言が見られ、自己の興味・可能性が拡散している状態であると考えられる。

以上より、高群に関しては、自己の興味や価値観、将来の志向が明確であり、低群になるにつれ、それらを模索中であったり形成途上であったり拡散している傾向が見られた。また、志向性の内容に関しては、高群では、次世代への責任が意識されたものであったが、中群・低群になるにつれ、個人の興味関心での志向性を語るにとどまっていた。これらから「自己の可能性への志向性」因子の内容妥当性はおおむね確認されたと考えられる。

イニシアティブに関する発言 (Table 7) 高群 4 名 (B: 65.39点, A: 62.78点, E: 62.78点, H: 60.17点), 中群 2 名 (C: 54.95, D: 54.95点), 低群 3 名 (F: 44.51点, G: 39.29点, I: 28.86点)

イニシアティブについては、高群 (A, B, E,

H) では「楽しいことを考えるのも好きですし、うん、実行していきたいなとも思いますね。(A)」や「チャレンジすること好きですね。新しいことは結構好きなので、・・・何かやっぱ時間があり余ってるので、大学生って、その時間をどう使うかで、全然違ってくると思うので、やれることはやっとうるって感じですね。(B)」, 「もう次々といろんなものやりたい、これもやりたい、あれもやりたいねって言って、こういうコンサートやりたいねって言って、そんな感じで先輩たちを巻き込んでっていう (H)」や、またEのように「私の表現したいっていうことの、表現したいって思ったことが、何ていうか、足にいくんですね。(E)」など表現手段を持っている姿勢の者もいた。これらの協力者の特徴としては、意欲的でエネルギーが高く、積極的に行動し、表現していく様子が共通して述べられていた。中群 (C, D) では、「趣味は、創作っていうか・・・とにかく、絵とか文章とかが好きっていうか。(C)」 「あまり他人に理解されない趣味だから、何かあんまり人に話せないことなんですけど。だからその日常生活で表現できないことを表現するものっていう感じですかね。(C)」や「新しい物にチャレンジすることは好きですね。小学校の教員になっても、どんどん新しいものを取り入れて、新しい物にチャレンジしたいと思うので。(D)」 「やっぱり決めたことには、行動しますし、興味のある分野には積極的に出向いて、その興味のあることを体験しようと思いますし (D)」と自分に合った手段で自己表現をしていることや自分の興味への積極性を述べている。これにはC, Dは中群ではあったが、Z得点が54.95とほぼ高群に近い値を示していることも関連しているだろう。低群 (F, I) では、「何かとりあえず適当に、まあ今日過ごしとこうみたいな。(F)」 「チャレンジしようと思うのは好きなんですけど、チャレンジした瞬間に後悔します。やる気はあるんですけど、始めると何か、続けるだけの根気がないんですよ。(F)」や「(チャレンジすることは) あんまり好きじゃないですね。(面白いことを考えたり企画したりする

Table 7 イニシアティブ得点に対応する面接協力者の回答（抜粋）

群	協力者	性別	イニシアティブ	質問「チャレンジすることは好きですか」「面白い事を考えたりするほうですか。」
	B	女	65.39	チャレンジすること好きですね。新しいことは結構好きなので、…何かやっぱ時間があり余ってるので、大学生って、その時間をどう使うかで、全然違ってくると思うので、やれることはやっとうって感じですね。
	A	男	62.78	「自分が勝負できるなっていうところはチャレンジすごいしてって、してくのは好きなんですけど、…（アイデアが）いろいろ上がってきます。…楽しいことを考えるのも好きですし、うん、実行していきたいなとも思いますね。
H	E	女	62.78	表現するっていうことにおいてのタップダンスっていうのが大きくなっていったので、習い事程度ではなくって、もっと近い。…私の表現したいっていうことの、表現したいって思ったことが、何ていうか、足にいくんですね。…おもしろいなとか思うこととか、そういう発想はあります。発想はあるんですけど、形にするまでの力っていうか、どう表現するかとか、…その発想をどう見せる、…そこが弱いと思いますね、まだ。…やっぱエネルギーが内に閉じこもったまんまなんです。…企画したりとかは好きですけど。見せていくのが、そこが弱いですね。
	H	女	60.17	もう次々といろんなものやりたい、これもやりたい、あれもやりたいねって言って、こういうコンサートやりたいねって言って、そんな感じで先輩たちを巻き込んでっていう…（コンサートを）半年前から私が企画していて…。
	C	女	54.95	趣味は、創作っていうか、小説っぽいものを書くのが趣味で。…とにかく、絵とか文章とかが好きっていうか。…そうですね。自己表現だけでも、…なんだろう、自分の小説のキャラクターをすごく、すごく作りこんで、その世界に浸ってるってことがあって、あまり他人に理解されない趣味だから、何かあんまり人に話せないことなんですけど。だからその日常生活で表現できないことを表現するものっていう感じですかね。
M	D	男	54.95	やっぱり決めたことには、行動しますし、興味のある分野には積極的に出向いて、その興味のあることを体験しようと思いますし。…新しい物にチャレンジすることは好きですね。小学校の教員になっても、どんどん新しいものを取り入れて、新しい物にチャレンジしたいと思うので。チャレンジすることが好きだからこそ、もしかしたら小学校の教員を選んだというのもあるかもしれないです。
	F	男	44.51	今の自分の生き方は、基本的にやる気がないと思ってます。…何かとりあえず適当に、まあ今日過ごしとこうみたいな。…チャレンジしようと思うのは好きなんですけど、チャレンジした瞬間に後悔します。やる気はあるんですけど、始めると何か、続けるだけの根気がないんですよ。」
L	G	男	39.29	（聞くことが出来なかった。）
	I	女	28.86	（チャレンジすることは）あんまり好きじゃないですね。…（面白いことを考えたり企画したりすることは）あまりそうでもないですけど。

注）文中の（ ）内は筆者による補足、…は省略。群分けの基準は、H: $Z > 55$, M: $55 \geq Z \geq 45$, L: $45 > Z$ (Z: 標準化された得点)

ことは）あまりそうでもないですけど。(I)」といった表現が見られた。これらの発言には、物事への意欲や実際の行動に移すエネルギーが低下しているような特徴が示されていた。

以上より、高群では意欲の強さや行動への積極性が見られたのに対し、低群ではそれらが低い傾向にあり、Z得点と対応した結果が示された。このことより「イニシアティブ」因子の内容妥当性は示されたと考えられる。

総合考察

主体的選択についての概念的検討

本研究の結果から、青年がアイデンティティを

統合し、西平（1990）が述べる意味での成人になるために必要な人格特性としての主体的選択傾向を測定する尺度を作成した。主体的選択尺度は因子分析の結果、「意志の強さ」「自己の可能性への志向性」「イニシアティブ」の3因子を抽出することができた。量的分析により主体的選択尺度とErikson（1959 小此木訳編 1973）の漸成発達理論の第2段階「自律性対恥・疑惑」、第3段階「主導性対罪悪感」との間に正の相関が見られ主体的選択尺度との構成概念妥当性が示唆されたとともに、面接調査の結果からは、主体的選択尺度「意志の強さ」「自己の可能性への志向性」「イニシアティブ」の3因子の内容妥当性を検討し、

主体的選択尺度3因子それぞれの内容妥当性がおおむね示された。

ここで、主体的選択尺度を構成する「意志の強さ」「自己の可能性への志向性」「イニシアティブ」が主体的選択にどのように関わるものであるか、概念的検討を行う。主体的選択とは、西平(1990)が“投企(仏 *Projet*)”という言葉で説明しているように青年が、自らの生き方を自らで選び取り、その選択に責任を持ち、使命感を持って生きることである。そこには、“生活様式の選択”^{ライフスタイル}という側面である個別性と人類への歴史的な責任という側面を持つ歴史性がある。本研究で作成した主体的選択尺度における「意志の強さ」は、項目の内容および面接調査の結果から検討すると、選択に関する責任感や使命感を表しているものと考えられる。それは、自己の主体的な選択を一貫して保ち続ける力であると言い換えられる。Erikson(1964 鑑訳 1971)は、意志力を“たとえ幼児期における避け得ざる恥や疑惑の体験をもちつつも、自己統制と同様に、自己の自由な選択の努力をする不断の決意”であると述べており、この点で、Eriksonの理論とも合致すると言える。

次に、「自己の可能性への志向性」について、項目の内容および面接調査の結果から検討を行う。「自己の可能性への志向性」は、項目の内容からは将来や価値観といった青年にとって中心的な選択がどれほど成されているかということを表していると考えられる。また、面接調査の結果、「自己の可能性への志向性」のZ得点高群では、志向性の内容に関して次世代への責任が明確に意識されていたのに対し、中群・低群になるにつれ、個人の興味関心からの志向性を語るにとどまっていた。次世代への責任ということは、人類への歴史的な責任を意味し、歴史性が強く現れていると考えられる。また中群や低群では歴史性はあまり意識されておらず、個別性のみに基づいた選択であると考えられる。これらより、「自己の可能性への志向性」は、その高低に対応し、主体的選択における個別性から歴史性を含んでいく推移を表し、西平(1990)の述べる“自己と社会・政治・歴史

が統合されてゆく過程”の様相を反映していると考えられる。

「イニシアティブ」は、Erikson(1959 小此木訳編 1973)の漸成発達理論の第3段階の課題のポジティブな側面をあらわす言葉であり、項目の内容は、企画力、実行力、リーダーシップといった内容である。面接調査の結果では、この得点の高低に対応して、意欲の強さや行動への積極性が語られていた。Erikson(1959 小此木訳編 1973)は、イニシアティブを獲得することが“失敗をすぐに忘れさせ、望ましいと思われるもの(たとえそれが不確実、かつ危険にすら見えても)へ向かってひるむことなく、よりの確に接近することを可能に”し、“積極的で絶えず動いているその性質上、自律に対して、さらに仕事を引受け計画し‘果敢に取組む’という特質をつけ加える”と述べている。言い換えれば、課題や仕事に対して、失敗を恐れることなく、より現実的に取り組むことができるという主体性の強さを表しているということであり、本研究の結果はErikson(1959 小此木訳編 1973)のイニシアティブの概念と合致していると言えるだろう。

主体的選択とアイデンティティ統合の関連

量的分析の結果、主体的選択尺度の3因子とアイデンティティ統合の実感である充実感およびアイデンティティ統合の各側面には正の関連が見られ、主体的選択尺度得点の高低とアイデンティティ統合には関連があることが実証的に示された。さらに、3つ因子それぞれをアイデンティティ統合について考察を行う。まず「意志の強さ」は、本研究の結果、使命感や責任といったことをあらわすと考えられることは先も述べた。大野(2000)は、アイデンティティの表れとして、使命感や責任という言葉을挙げており、ベートーヴェンの伝記分析(大野, 1996)を行った際には、難聴を抱えたベートーヴェンがアイデンティティによる使命感を一つの要因として、内的な危機を克服し、音楽家アイデンティティから芸術家アイデンティティへとアイデンティティを転換させたことを見いだしている。すなわち、「意志の強さ」は、内

的な危機を迎え、一時的にアイデンティティ拡散状態に陥った際に、主体性を失わずに、再度立ち上がるための強さを表していると考えられる。

次に「自己の可能性への志向性」について考察を行う。「自己の可能性への志向性」は量的分析において漸成発達理論の第5段階「アイデンティティ達成対アイデンティティ拡散」と特に強い正の相関が見られ、これはアイデンティティの感覚を得るために特に重要な因子であると推察される。面接調査の結果からは、Z得点が高群になるにつれ、明確な価値観や将来像を持っている様子が見出され、低群では、それらがはっきりとせず模索している状態であった。このような価値観や将来像は青年がその後の生き方を決定していく上で重要な領域であると考えられる。それは、明確になった志向性を基準として、これから先に何を選択し、何を選択しないかということが決定されてくるからである。選択を重ねることでアイデンティティは徐々に統合されていく。以上より、「自己の可能性への志向性」は、アイデンティティ統合において選択を重ねる始まりの部分、いわば中核の役割をするものではないかと考えられる。

最後に「イニシアティブ」について、アイデンティティ統合との関連を考察する。「イニシアティブ」は青年期において「役割実験」(Erikson, 1959 小此木訳編 1973)という形で表れる。“役割実験”とは、試行錯誤の結果、「思い切って、・・・する」ことを繰り返すことで、最終的に青年がアイデンティティを確立し、社会への参加へと至るためのものである。“役割実験”について西平(1990)は、幼児期のごっこ遊びとの比較として、ごっこ遊びが空想的な同一視であるのに対し、“青年の役割実験は現実社会での行動となる。多くの可能性の中から、もっとも自己のアイデンティティにふさわしい行動様式を選ぶという点で、選択であり〈投企〉である”と述べている。役割実験は一見社会には受け入れられないような形をとることもあるが、Erikson (1959 小此木訳編 1973)によれば、青年にとっては、“その結果、自我の統制力がより有効なものにな

る諸経験を得ようとする一種の実験”であるという。青年は投企としての役割実験を通し、経験を重ね、試行錯誤の中で自己のアイデンティティをより確かなものとしていくものと言えるだろう。

今後の展望

本研究により、主体的選択とアイデンティティの統合を始めとするErikson (1959 小此木訳編 1973)の人格発達理論との関連が示された。

本研究では、主体的選択尺度3因子は、本来は青年期以降に獲得する親密性や生殖性とも正の関連が見られた。青年期に主体的選択がなされることで、青年期以降の主体的選択が親密性や生殖性の獲得とどのような様子で関連しているのかを検討することも、やがて成人になっていく青年に関わる際に、重要なことであると考えられる。

また本研究では、主体的選択に関する人格特性の変化については検証がなされていない。例えば、モラトリアム期を生きている者が、どのようなことをきっかけにして主体的選択を行い、アイデンティティが統合の方向に向かい始めることができるのかを検討し、主体的選択を行えるように導く可能性を研究することによって、青年が限りあるモラトリアム期間を有効に過ごし、青年から成人への橋渡しを援助できる可能性が増すものと考えられる。今後、本研究で見いだされた主体的選択尺度の3因子「意志の強さ」「自己の可能性への志向性」「イニシアティブ」のそれぞれがアイデンティティ統合にどのようなプロセスで関わっていくか、より詳細に検討することで、主体的選択ができる人格特性について変化可能性を探ってみたいと考える。

引用文献

- Adler, A. (1932). *What Life Should Mean to You*
(アドラー, A. 高尾利数 (訳) (1984). 人生の意味の心理学 春秋社)
- Bühler, C. (1967). *Versuch einer Analyse und Theorie der psychischen Pubertät*. Stuttgart-Hohenheim : Gustav Fischer Verlag.

- (ビューラー, C. 原田 茂 (訳) (1969). 青年の精神生活 協同出版株式会社)
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York : W. W. Norton.
- (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 (1) みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. New York : International University Press.
- (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1964). *Insight and responsibility*. New York : W. W. Norton.
- (エリクソン, E. H. 鑑幹八郎 (訳) (1971). 洞察と責任 誠信書房)
- Maricia, J.E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか・大野千里 (2003). Oches & PlugのErikson and Social-Desirability Scaleの日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究, 45, 65-76.
- 西平直喜 (1979). 青年期における発達の特徴と教育 子どもの発達の教育 6 岩波書店 pp.1-56.
- 西平直喜 (1990). 成人になること——生育史心理学から 東京大学出版会
- 大野 久 (1984). 現代青年の充実感に関する一研究——現代青年の心情モデルについての検討 教育心理学研究, 32, 100-109.
- 大野 久 (1995). 青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見孝 (編) 講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し——青年期 金子書房 pp.89-123.
- 大野 久 (1996). ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書の「自我に内在する回復力」からの分析 青年心理学研究, 8, 17-26.
- 大野 久 (2000). 自我同一性 (アイデンティティ) 福富護他 (編) 青年心理学事典 福村出版 p.151